

## 私の戦争体験

富永 徳八（大正 15 年生まれ）

昭和 18 年、高田の町は軍事一色にあふれていた。この時期 17 歳の私は高田農学校生徒で同校の寄宿舎に生活していた。7 月下旬のある日、担任の先生から家に帰って明日親を連れて来る様にといわれ、翌日親父と共に学校に出向いた。私も同席した親父に先生は軍の要請でお宅の息子を海軍に志願させなさいと。親父は困惑した様子だったが書類に印を押した。そばに居た私は大声で叫びたい位の喜びだった。こうして海軍志願は一発できた。

8 月に入り直江津北国民学校で試験が行われた。最初に身体検査と数学で、これで多くの人が落とされた。その後の地理、歴史、物理、化学などはほとんどの人が合格し、更にこの中から九月に入り舞鶴<sup>まいづる</sup>の栗田航空隊で二次検査と称する体験入隊があり、11 月に入り高田市長通達（兵第 1567 号）で飛行兵に採用する旨の通知があった。当時私は学校の寄宿舎に居住していたので、高田市出身扱いだった。

11 月 28 日、県内各地の中等学校から合格した 15 才から 19 才の大勢の生徒が糸魚川<sup>いといがわ</sup>国民学校に集合して、県の係員に引率され、奈良県丹波市町<sup>たんば</sup>（現天理市<sup>てんり</sup>）に向かった。ここには天理教の本庁があり全国から集まる信徒<sup>しんとう</sup>のための多くの大きな寮があり、これを軍が接收<sup>せつしゅう</sup>して急造の兵舎としたものに全国から 10,000 人が集められた。

昭和 18 年 12 月 1 日入隊式があり、海軍甲種飛行予科練習生<sup>こうしゅう</sup>（通称予科練<sup>よかれんしゅうせい</sup>）となり、即訓練が開始された。訓練は体育と学科で駆け足、体操、格闘技、学科では数学など一般的なもの、そして最も力が入ったのがモールス通信（トツートン）で、これが毎日午前午後 2 時間程行われ、これでもかこれでもかとおつめ込まれた。

こうして 19 年 6 月 1 日、第 1 学年を終わり、飛行兵長に進級し飛行機の操縦部門<sup>そうじゅう</sup>、航路などを担当する偵察部門<sup>ていさつ</sup>に組分けされた。私は操縦を希望したが偵察だった。8 月に入り 9 日間の休暇があった。夫々の生家<sup>それそれ</sup>に帰った。休暇中、白の七つ釦<sup>ぼたん</sup>の制服で高田の町を意気揚々と歩き学校にも行った。

この休暇が終わり帰隊して 10 日ほど過ぎた頃だったろうか、いつもと違ったかたちで一堂に集められた。そして隊長の海軍大佐<sup>たいさ</sup>が直接話した。「現下の戦況は良好とはいえず、更に飛行機の生産が間に合わない。したがって直ちに諸君を決戦場へ送る事が出来ない。今般海軍に必死必殺の新兵器が採用された。しかしこの兵器の乗員は高度の危険が伴う。諸君は大空を目指して今日まで来たが、この時局を理解してこの新兵器に参加する勇士はいないか。」いわゆる特攻隊員の募集であった。ほとんど全員が二重丸の熱望<sup>ねつぼう</sup>だったとは思われるが、2、3 日後 240 名の隊員の中から 24 名の氏名が発表され、私もこの中の 1 人に入っていた。

9 月初め、各部隊から選ばれた 400 人が長崎県佐世保軍港に近い川棚魚雷艇訓練所<sup>かわたなぎようらいてい</sup>に入所した。ここでは 5 メートル位のベニヤ板で出来た舟に 250 キログラムの爆薬とトラックエンジンをつけた震洋艇<sup>しんようてい</sup>と称する 1 人乗りのボートであり、これを夜間敵艦船に体当たりする訓練を約 1 か月程

受けた。

10月下旬、この訓練が終わり、第26震洋特別攻撃隊が編成された。即ち、この爆薬を積んだ船を運転する我々予科練出身者50名とこれを支援する基地隊員など合わせて200名程の部隊である。11月から針尾海兵団佐世保防備隊などに待機して進出の命令を待った。始め宮古島、比島と進出地が示されたが、最終的に石垣島となり、2月下旬佐世保を出港した。途中アメリカの潜水艦などに狙われたりしたが何とか逃げて、3月1日に石垣島に上陸した。しばらくして石垣島と西表島の中程にある小浜島に移りここを基地とした。

4月に入り沖縄戦が始まり、この島も爆撃、銃撃がなされたが、私達には爆装した舟以外の兵器はほとんどなく、物かげなどにかくれて過ごした。沖縄戦が終わった頃からは米機もときどき上空に現れる程度であった。終戦を聞いたのは8月17日頃だったと思う。本部の幹部級はその前に知っていたようだ。

この頃手持ちの食糧が極めて不足していた。私と2、3人の農学校出身者、農家出身の兵隊によってサツマイモ作りの畑仕事にたずさわっていた。

11月下旬、アメリカの輸送船で横須賀久里浜に上陸して、12月初め、家に帰った。悲壮な意気込みで入隊してより、丁度丸2年が経過し、19才7か月になっていた。

終戦後の政治、経済、思想など大混乱の中に放り込まれ、自然の生活に流された。が、体で覚えた旧海軍生活は、たった2年間ではあったが忘れられない。それが整理整頓、掃除、洗濯など80才を越えようとする今でも体のどこかで動いている様な気がする。

余談になるが7、8年前のこと、復員した当時の19才と同年代になった最愛の孫が「おじいちゃん、危険だということろへ志願してまで出て行くななんて、そんなことはあり得ないよ」と事もなげにいう。丁度私たちの年代で昔の徳川時代を想像する様なものなのか。以来私は戦争体験など自分一人の胸で懐古することにしてしたが、今度おぼろげな記憶をたどって以上を書きました。